

広島大学技術センターに望むもの

技術センター運営委員

大学院医歯薬学総合研究科 教授 井内 康輝



広島大学技術センターが、特化した技術力をもつ広島大学職員の組織として発足して丸三年以上が経過しようとしている。平成20年4月からはいよいよ、業務依頼・派遣システムが試行ながら運用されることとなった。このシステムの運用によって、これまで各研究科や研究所・各講座に配属され、全学の教員にその存在と技術力が十分認識されていたとは云い難い技術職員の皆さんが、全学的組織の下でその専門的な知識と能力を発揮して、広島大学全体の教育や研究に寄与する仕組みが出来上がったことになる。

もとより技術職員は、各分野に特化した能力をもつゆえに、教育・研究の特定の領域に限って貢献するものと考えられる傾向があったが、学問の進歩に伴って研究面での境界が不明瞭となり、特にその研究手法については多くの分野で同様の手法が用いられることも少なくなかった。こうした状況の下では、技術職員のもつ能力は、従来の分野を越えて、広い範囲の教育・研究に貢献できる可能性が指摘される。

私自身は医歯薬学総合研究科（旧医学部）病理学教室の教員である。私の教室を例にとれば、小講座であった時代から技術職員2名が配置されてきた（現在は1名）。その理由は病理解剖介助という特殊な専門的知識を必要とする業務に従事し、年間1日も休みなく待機していなければならないという立場であるからであった。しかし近年は、大学附属病院における病理解剖数は減少して、技術職員の仕事の中でその占める割合が小さくなる一方で、疾病の本態を追求する病理学という学問の進展によって、細胞質内・核内の各種蛋白分子の証明に用いる免疫組織化学的染色や、細胞の核内 DNA, RNA を抽出してその異常を把握するための分子生物学的手法が技術職員の手にも委ねられる時代に入ってきた。このような研究手法の進歩は必ずしも病理学分野の研究にとどまるものではなく、広く生物学に応用できるものである。従って病理学教室の技術職員の専門的知識と能力は、主として霞キャンパス内の研究者のニーズに応じて活用することができるようになったといえる。

私達はすでに数年前より、講座単独で“病理研究支援室”を立ち上げ、こうした学内の要望の一部に応える努力を行っており、こうしたニーズが幅広くあることを知った。技術センターはこれと同時期に発足したもので、私達は技術センターの理念と目標に賛同するものであり、こうした考えをすすめることで広島大学全体の教育・研究の発展に貢献できると考える。

私の身近な例としては、霞キャンパスにおける研究機器の共同利用のもとに、これら機器のメンテナンスを担う技術職員、霞地区では負担の大きい学部教育実習の準備や実施を担う技術職員、教育・研究の基盤となるコンピューターネットワークを担う技術職員などが技術センターから必要数配置されるようになれば、より充実した教育・研究を構築でき、若手研究者の育成・研究の進展に繋がると思われる。

これからの技術センターは、これまでの枠組みに縛られることなく、ニーズに応じた能力をもちつつ、教育・研究の変化に迅速に対応していくことも必要であろう。そのために必要なものとして、ニーズの把握のための業務依頼・派遣システムであり、新たな技術の導入のための研修会の実施や他機関への派遣による研修などが位置づけられると考えられる。今後、技術職員の皆さんの存在が全学教員に等しく認識され、その必要性について大いに議論がなされることを期待したい。